

**10月7日ゼミは開催します****新しい騎馬民族説の証明・バージョンⅡ**

—10月7日ゼミ紹介文 槌田鉄男会員記—

私は2017年11月のゼミを皮切りに都合3回のゼミで“女王の国々と狗奴国”と“新しい騎馬民族説”を紹介し、その資料作りの中で自説を構築してきました。このような場を提供して頂き本当に感謝しております。2つの説は密接に関係しており、“女王の国々と狗奴国”が九州になれば“新しい騎馬民族説”は成り立ちません。昨秋のゼミでは“女王の国々と狗奴国”について発表したので今回は新情報を取りこんだ“新しい騎馬民族説”のバージョンアップ版を紹介します。

今回はまず江上波夫氏が提唱した騎馬民族征服王朝説を振り返ってみました。氏は中央アジアから東北アジアに至るいくつもの騎馬民族の風習を詳細にわたって提示し、そこに示された内容と古墳時代の日本社会との類似性を述べています。例えば、連、臣、造などの氏族制や特定の一族(天皇家)が皇位を継承することなどを取り上げています。その概要は『東北ユーラシア系の騎馬民族が、南朝鮮を支配しやがて弁韓を基地として日本列島に入り、4世紀後半から5世紀に、大和地方の在来の王朝を支配し、それと合作して征服王朝として大和朝廷を立てた』(ウィキペディア)というものであり、古墳時代前半が南方的、農民的、平和的で弥生時代の延長にあったのに対し、古墳時代後半は北方的、武人的、軍事的でありそこには大きな断絶があったとするものです。

この説は3世紀から7世紀に至る古墳時代を通してそこに断続性は見られないと言う反論などから現在ではほとんど顧みられなくなっています。しかし、これらの反論は日本の古墳時代と騎馬民族国家との類似性そのものを否定しているわけではありません。何らかの影響があったであろうこと自体は認めていますが、なぜそのような強い類似性が生まれたのかについて納得いく回答は得られていません。そのような中、自説は大きな変化があったのは古墳時代が始まった3世紀つまり邪馬台国の時代であり、この時期に騎馬民族がきたとするものです。江上氏はなぜ3世紀に注目せず4世紀後半から5世紀としたのか。それは氏が逝去された2002年時点ではまだ前方後円墳が誕生した纏向遺跡の発掘が充分に進んでおらず初期型前方後円墳の誕生とその後の急拡大についても十分な研究がなされていなかったためだと考えられます。

自説では江上氏の死後判明した3世紀における前方後円墳の誕生とその後の日本各地への急速な展開は交通機関の革新なしにはあり得ないとし、この時期に騎馬民族の到来があったとしました。しかし、到来した数は多くはなく騎馬による武装で圧倒的な優位に立ち少人数でも制圧できたと考えていたのです。しかし、少人数では全国で15万基を超えるとされる古墳築造のための工数確保は容易ではありません。自説にとって大きな課題でした。ところが2019年秋、遺伝子学会から画期的な説が発表されていたのです。それは『現代の日本人の多くは古墳時代に東北アジアを中心とした東アジアからやってきた渡来人から繋がった』と言うものです。

図らずも私はこの説が発表されたことに当時気づいていなかったのですが、この新説は自説にとって強い追い風になります。東北アジアはまさに私の言う騎馬民族・扶余がいた地だからです。そして、多くの現代人に影響を与えるほどの渡来人が来たのであれば人口に大きく影響したのではないかと思いい人口動向を調べてみました。すると古墳時代の約400年間に日本の人口は7.5倍にもなっていたのです。日本の人口急増はこれまで稲作農耕伝来による弥生時代から始まったとされていたと思いますが、古墳時代からと言うことになります。そしてこのことは遺伝子学会の新たな説が正しかったことの裏付けになると同時に『新しい騎馬民族説』によって膨大な数の古墳の造営がなぜ可能になったのかと言う謎が解決したことになるのです。

今回、このことをベースに魏志倭人伝を読み直すとその書かれた背景に魏の將軍・司馬懿の存在が浮かび上がってきました。魏志倭人伝は古墳時代が始まるキッカケを語っていたと言うことになります。  
(完)

## ゼミ会場と時間

13:15～16:50

- 1、全水道会館(水道橋駅)・中会議室(5階)
- 2、JR水道橋駅東口(お茶の水寄り)下車徒歩2分。
- 3、都営三田線水道橋駅下車、A1出口は長い上り階段。エレベーター利用のA3出口が便利です。
- 4、電話番号:03-3816-4196

## これまで解明された稲のDNA分析

—磐城妙三郎記—

「稲の日本史」佐藤洋一著の改訂版が平成30年3月に刊行された。初版から15年を経て研究が大きく進展した部分を最新のデータに基づき書きためたそうである。DNA分析技術の進歩によりジャポニカ品種の区別の精度とデータの蓄積が大きなポイントとしている。従来は土器から発見される粳痕の光学的観察や炭化米の炭素年代測定と土壤中のプラントオパール分析による稲の痕跡を発見することが稲作開始を証明する主な手段であった。1990

年代後半になると植物のDNA研究から植物細胞の器官である葉緑体DNAが植物の分類や進化の分析に有効であることが明らかになり、また植物細胞の核DNAのSSR領域と呼ばれる部位の塩基配列からさらに詳細な品種分類が可能であることが判ってきたという。アジア稲にはインディカ種とジャポニカ種があり、ジャポニカ種には熱帯ジャポニカと温帯ジャポニカがある。インディカ種と熱帯ジャポニカ種は主にインド、東南アジア、中国南部などの熱帯・亜熱帯の地域で栽培されている。また温帯ジャポニカ種は主に中国東北部、朝鮮半島、日本などの温帯の地域で栽培されている。葉緑体DNAによる分析では植物の種の間で異なるPS-IDと呼ばれる領域があり、その部位の塩基配列を較べることで種の特定ができるようである。塩基とはアデニン(A)、シトシン(C)、グアニン(G)、チミン(T)という4種類の有機化合物でDNA(デオキシリボ核酸)の構成要素である。PS-ID領域の初めの塩基配列がジャポニカ種ではCが六個、Aが七個並ぶ6C7A、またはCが七個、Aが六個並ぶ7C6Aのいずれかのタイプであり、インディカ種では前記2タイプ以外のさまざまなタイプがあることが判っている。またジャポニカ種でも温帯ジャポニカは6C7Aの1タイプで熱帯ジャポニカでは6C7A、7C6Aの2タイプあることが判っている。青森県田舎館村・高樋Ⅲ遺跡から出てきた一粒の炭化米から熱帯ジャポニカの7C6Aタイプが初めて検出されたそうである。(1996年)さらに2年後の1998年に滋賀県守山市の下之郷遺跡から出た多数の炭化米を調べたところ約4割近くが熱帯ジャポニカであったそうである。佐藤洋一郎が2001年までに調べた弥生時代の遺跡から出た炭化米120個のうち約40%が熱帯ジャポニカであったことが判明している。このことは何を示唆しているのだろうか。いっぽう核DNAの分析からは次の事が判っているそうである。日本列島、朝鮮半島、中国大陸で栽培されている温帯ジャポニカの在来種は250品種ある。この250品種について核DNAのSSR領域のうちRM1部を調べたところ8種類の変形版があることが判り、小文字のaからhを付して表す。中国大陸では8種類すべてのタイプが分布しているが朝鮮半島ではbタイプを除く7タイプが分布している。日本列島ではa、bタイプがほとんどでcタイプが若干含まれということである。RM1以外を調べ

でも同様な結果であるという。このことから日本列島には a、b の 2 タイプのみが来たというのが合理的な解釈なのか。佐藤洋一郎は集団遺伝学で云われるボトルネック効果ではなかろうかと推測している。渡来した温帯ジャポニカの種子はごく少量であり、それが増殖を繰り返すうちに a、b タイプに集約していったというものである。さらに b タイプが朝鮮半島には無い為、b タイプは中国大陆から直接来たとし、朝鮮半島からは複数タイプが来たがボトルネック効果で a タイプが残ったと推測している。また弥生遺跡から出る炭化米のうち約 40% が熱帯ジャポニカであることに関しては温帯ジャポニカの渡来以前に、時期、経路は不明であるが熱帯ジャポニカの渡来があり以降徐々に温帯ジャポニカに置き換わっていったと推測する。在来品種の調査で熱帯ジャポニカの遺伝子的特徴を持った品種がみついていることがその理由である。一方、元日本言語学会会長の松本克己は言語学の立場から日本の稲作起源を検討して次のように推定している。

「言語面から眺めるかぎり、東アジア北方へのイネの伝来は、南方で起こったような稲作民の移住・拡散という形ではなく、作物としてのイネだけが何らかの流通経路で伝えられ、それを列島の縄文人や朝鮮半島の住民が自主的に受容した結果と見ざるを得ない。その理由は長江流域で発祥したもろもろのイネ・コメ語彙が、後代に流入したとみられる外来語を除いて、古い日本語、朝鮮語の中に全く見あたらないからである。」とし、長江流域に発祥した稲作は言語系統的には、オーストロネシア、オーストロアジア、そしてタイ・カダイという 3 つの語族が関係していたとして、今から 4~5 千年前頃、台湾からフィリピン、インドネシア島嶼部および中国大陆西南部を南下してインドシナ半島からさらにインド東部へ拡散させ、タイ・カダイ系諸族はモンゴル軍団がユーラシア全域を席卷した 12~13 世紀の頃、稲作民の南方拡散の最終段階として東南アジア地域へ広がったと推定した。これら 3 つの語族のイネ・コメの語彙には日本語の語源を求めることは出来ないとしている。また稲・米の漢字の元となる漢語は黄河中流域に今から 4 千年前に出現した漢民族による「夏」という国に発したとされ、言語系統的にはチベット・ビルマ語族（チベット・シナ語族）とつながる。漢民族の農産物の主食はムギ、アワ、

キビなどが中心でイネを受容したのはそれほど古くない。稲・米の漢語の読みは現代／上古それぞれ [dao / dua]、[mi / m[j]ai] で、上代日本語の読みである [Ina~e, uka~e]、[yona~e, kome] とはつながらない。また朝鮮語の読みでも [pyə, narak]、[ssar<psar<posar] でやはりつながらない。稲作に関する日本語の語彙は周辺の稲作に関わったとみられるどの語族にも見出せず、日本列島への周辺稲作民の移住・拡散はなかったことの原因としている。<参考文献>

『稲の日本史』佐藤洋一郎著 角川ソフィア文庫  
2018 年

『ことばをめぐる諸問題（言語学・日本語論への招待）』松本克己著 三省堂 2016 年

## 次回11月4日ゼミ・テーマ

次 黄禍論—近現代史の視点—齊藤 潔会員  
以上。